

サーチュイン遺伝子とは？

老化を逆転させる
「長寿遺伝子」完全ガイド

最新科学が解き明かす7つの活性化メソッド。

運動・断食・NMNサプリの真実を、ハーバード大の研究を基に徹底解説。



BASE STUDY
ハーバード大 最新研究



REFERENCE
論文50本以上を精査



TIME
約12分で完全理解

LIFE SCIENCE SERIES

Genspark AI Slides

• TABLE OF CONTENTS

本日のアジェンダ

Total Duration: 12 min

PART 1: 基礎理論

- 01  サーチュインの基礎
定義・発見の歴史・SIRT1～7の機能

- 02  なぜ長寿遺伝子と呼ばれるか
寿命延長データの俯瞰とメカニズム

- 03  老化のメカニズムとNAD+
情報喪失仮説と補酵素の役割

- 04  活性化① 断食・カロリー制限
最も効果的なアプローチとプロトコル

- 05  活性化②-③ 運動・NMN
HIITとサプリメントの相乗効果

PART 2: 実践メソッド

- 06  活活性化④-⑦ その他のアクション
寒冷刺激・睡眠・ポリフェノール・ストレス

- 07  7つの方法の比較分析
効果・難易度・コストのマトリクス

- 08  NMNサプリの真実
最新のエビデンスと注意点

- 09  今日からの実践ルーティン
レベル別アクションプラン

- 10  まとめ
キーテイクアウェイと参考文献

サーチュイン遺伝子の基礎知識

■ 定義

サーチュイン (Sirtuin) は、**NAD+依存性脱アセチル化酵素**と呼ばれるタンパク質の一群。酵母からヒトまで進化的に保存されており、飢餓などのストレスに応答して細胞の生存と修復を促進する。

NAD+ 必須燃料：サーチュインが働くには補酵素NAD+が不可欠。
加齢と共にNAD+が減ると、サーチュインも働くなくなる。

○ 発見の歴史

- 1999年 MIT (Guarente)
酵母の**SIR2**遺伝子を活性化すると寿命が30%延長することを発見。
- 2003年 Harvard (Sinclair)
赤ワイン成分レスベラトロールがSIRT1を活性化することを発見。
- 2013年 Washington Univ (Imai)
NAD+前駆体(NMN)の投与による抗老化効果を報告。

☒ ヒトの7種類のサーチュイン

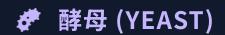
哺乳類 SIRT1～SIRT7

種類	主な局在	主な機能と役割
SIRT1 ★	核・細胞質	代謝調整・DNA修復・抗炎症 最も研究が進んでいる。カロリー制限の効果を模倣。
SIRT2	細胞質	細胞周期制御、脂肪生成の抑制、酸化ストレス応答
SIRT3	ミトコンドリア	エネルギー代謝・抗酸化 ATP産生効率化、活性酸素の除去。
SIRT4	ミトコンドリア	インスリン分泌抑制、脂肪酸酸化の制御
SIRT5	ミトコンドリア	尿素回路の制御、アンモニア解毒
SIRT6	核	DNA修復・テロメア維持 ゲノム安定性の維持に重要。寿命延長と強く関連。
SIRT7	核小体	リボソーム生合成、細胞増殖の制御

① SIRT1, SIRT3, SIRT6は特に「長寿」との関連が強く示唆されており、老化研究の主要なターゲットとなっている。

なぜ「長寿遺伝子」と呼ばれるのか？

◀ 寿命延長の実験データ



+30%

SIR2 過剰発現

Guarente (1999)



+50%

SIR-2.1 活性化

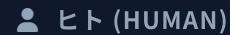
Kenyon (2003)



+16%

SIRT6 過剰発現 (σ^1)

Kanfi et al. (2012)



?

臨床試験 進行中

期待される効果を検証

❖ 寿命を延ばす3つの主要メカニズム



DNA修復

サーチュインは損傷したDNA部位に集まり、修復酵素をリクルート。ゲノムの不安定化（がん化や老化の原因）を防ぎ、細胞の若さを保つ。



代謝調整

ミトコンドリア機能を最適化し、エネルギー産生効率を向上。脂肪燃焼を促進し、糖代謝を改善することで、代謝性疾患のリスクを下げる。



炎症抑制

「老化は慢性炎症である (Inflammaging)」と言われる。サーチュインはNF- κ Bなどの炎症経路を抑制し、組織のダメージを最小限に抑える。

Source: Kanfi Y, et al. "The sirtuin SIRT6 regulates lifespan in male mice." Nature (2012)
Guarente L. "Sirtuins, aging, and metabolism." Cold Spring Harb Symp Quant Biol (2011)

老化のメカニズム：エピジェネティクスとNAD+

♪ 情報喪失仮説 (Information Theory)

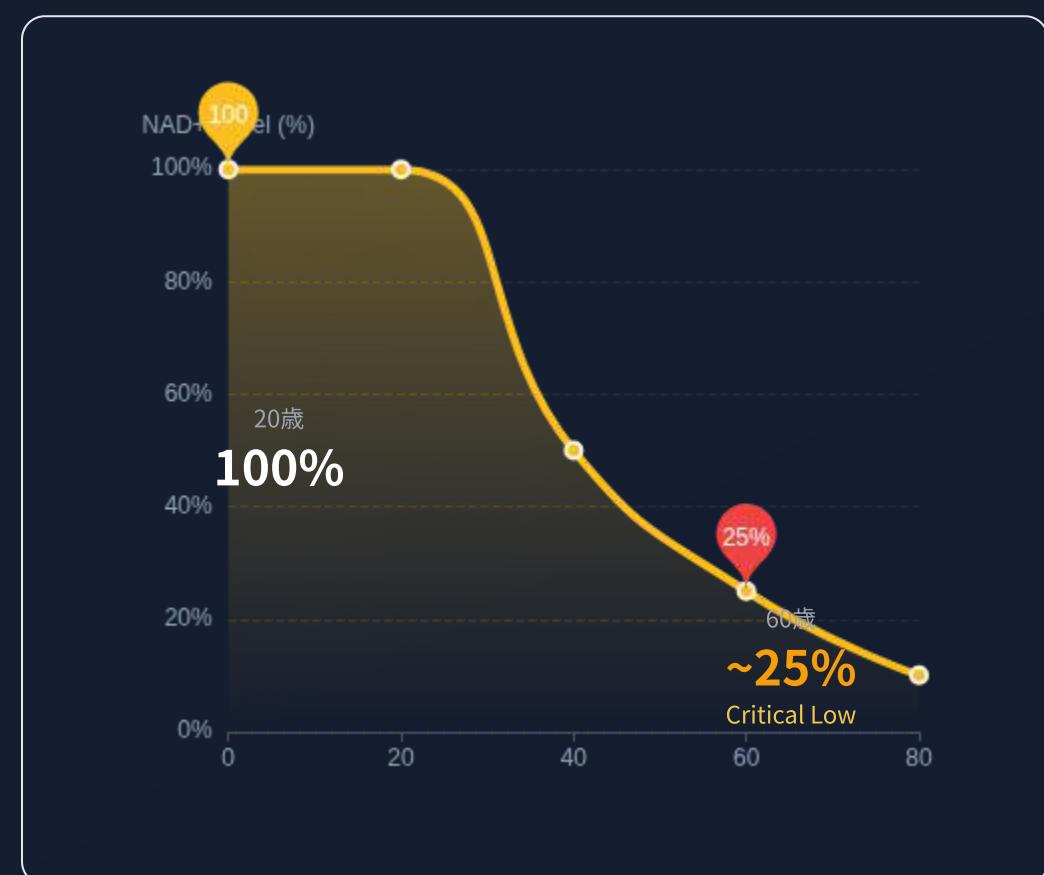
老化とは、DNA（ハードウェア）の損傷ではなく、**遺伝子発現制御（ソフトウェア）の乱れ**である。

David Sinclair教授はこれを「傷ついたCD」や「調律の狂ったピアノ」に例える。



□ サチュインの燃料「NAD+」の枯渇

サチュインが働くには**NAD+**が不可欠だが、加齢とともに劇的に減少する。これが「老化のアクセラ」となり、修復機能が低下する主要因となる。



PROBLEM
燃料(NAD+)不足により
修復部隊(SIRT)が動けない

→
SOLUTION
NAD+を補給・維持することで
修復機能を再起動可能

活性化① 断食・カロリー制限 (Fasting)

👑 最も効果的



サーチュイン活性化の「王道」

進化の過程で獲得した
「飢餓への適応システム」を利用

なぜ効くのか？

Step 1 空腹により細胞が「エネルギー危機」を感知



Step 2 AMPK（エネルギーセンサー）が活性化し、NAD+が増加



Step 3 SIRT1が起動し、細胞の修復・保護モードへ移行

推奨プロトコル

16:8断食

16時間空腹、8時間食事
(最も継続しやすい)

5:2ダイエット

週2日を500kcal以下に
(週末だけ実践など)

自分に合う方法を選択

OMAD

One Meal A Day
(上級者向け1日1食)

期待される効果

✓ SIRT1活性 **+200~300%**

✓ インスリン感受性の向上

✓ オートファジー促進 (細胞浄化)

✓ 内臓脂肪の燃焼促進

注意点

成長期の子ども、妊婦、摂食障害の既往歴がある方、糖尿病治療中の方は医師に相談してください。
水分補給は断食中も必須です（水、お茶、ブラックコーヒー）。

Source: Haigis MC, Sinclair DA. "Mammalian sirtuins: biological insights and disease relevance." Annu Rev Pathol. 2010

活性化②-③ 運動 × NMNサプリメント



運動 (Exercise)

HIIT / 筋力トレーニング

✿ メカニズム

- エネルギー消費ストレスによりAMPKが活性化し、SIRT1のスイッチが入る。
- 筋収縮がNAMPT酵素を増やし、NAD+合成を促進。

☰ 推奨アクション

- HIIT（高強度インターバル）：週2-3回、20分程度が効率的。
- 筋トレ：大きな筋肉（脚・背中）を刺激しSIRT3活性化。



NMN / NR サプリ

NAD+ 前駆体補充

▲ メカニズム

- 加齢で減少したNAD+を直接補給し、サーチュインの「燃料切れ」を防ぐ。
- NMNは体内で速やかにNAD+に変換され、全身の組織へ。

☲ 現状の知見

- ヒトでの効果：血中NAD+上昇、インスリン感受性改善などが報告。
- 不確実性：長期的な寿命延長効果や最適摂取量は研究段階。

💡 空腹時に行うと効果倍増（脂肪燃焼効率UP）

⚠️ 品質にバラつきあり。第三者検査済みの製品を推奨。

活性化④-⑦ その他のキーアクション



寒冷刺激

COLD EXPOSURE

✓ ACTION

冷水シャワー（最後30秒～2分）
または薄着で過ごす（19°C以下）

- 褐色脂肪細胞を活性化し、ミトコンドリアのUCP1発現を促進。
- SIRT3活性を高め、代謝効率と熱産生を向上。

4



良質な睡眠

QUALITY SLEEP

✓ ACTION

7～8時間の連続睡眠
就寝・起床リズムの固定

- サーチュイン(SIRT1)は体内時計遺伝子と連携して働く。
- 睡眠中にDNA修復とNAD+代謝のリセットが行われる。

5



ポリフェノール

ACTIVATOR MOLECULES

✓ ACTION

レスベラトロール、ケルセチン等
(赤ワイン、ベリー、玉ねぎ皮)

- 「植物のストレス応答物質」がSIRT1を直接活性化 (STACs)。
- 脂溶性のため、ヨーグルトやオリーブ油と一緒に摂取推奨。

6



ストレス管理

STRESS MANAGEMENT

✓ ACTION

瞑想、深呼吸、自然との触れ合い
慢性的な心理ストレスを避ける

- 慢性的な高コルチゾール状態はNAD+を浪費し、老化を加速。
- 「良いストレス（運動・寒冷）」と「悪いストレス（不安）」を区別。

7

7つの方法の比較 (効果×難易度×コスト)

方法 (METHOD)	効果 (EFFECT)	難易度 (DIFFICULTY)	コスト (COST)	推奨 (REC)
断食・カロリー制限	★★★★★	中～高	無料	✓
運動 (HIIT/筋トレ)	★★★★★	中	無料～低	✓
NMN / NR サプリ	★★★★★	低	高	○
寒冷刺激	★★★★☆	高	無料	○
良質な睡眠 (7-8h)	★★★★★	低	無料	✓
ポリフェノール	★★★★☆	低	低～中	○
ストレス管理	★★★★★	中	無料	✓

NMNサプリメントの真実：効果と注意点

✓ 科学的に確認されていること (Facts)

- NAD+レベルの上昇**：ヒト臨床試験において、経口摂取による血中NAD+濃度の上昇が確認済み。
- 短期的な安全性**：1日250～1250mg、12週間の継続摂取において重篤な副作用は報告されていない。
- 代謝機能の改善**：前糖尿病の閉経後女性において、筋肉のインスリン感受性が改善 (Yoshino et al., 2021)。

！ まだわかっていないこと (Unknowns)

- 長期的な安全性**：数年～数十年単位で摂取し続けた場合の影響は未解明。
- 寿命延長の実証**：ヒトにおいて「寿命が伸びた」という直接的なデータはまだ存在しない。
- がんへの影響**：がん細胞もNAD+を利用して増殖するため、既存の腫瘍を活性化させる理論上のリスクが指摘されている。

⊕ 賢い選び方チェックリスト

⚠ 第三者機関の分析済み

純度99%以上が証明されているか

☒ β-NMN 表記

生体利用可能な「β型」であること

!'; 製造元の信頼性

GMP認定工場、または国内製造

!'; 価格の妥当性

極端に安い製品は偽物の可能性あり

!'; SINCLAIR教授の個人的摂取例

「私は毎朝、NMN 1g をヨーグルトに混ぜて摂取している。ただしこれは個人的な実験であり、推薦ではない。」

- "Lifespan" (2019) より

※本情報は医療アドバイスではありません。サプリメントの摂取は個人の責任において、必要に応じて医師に相談してください。

今日から始める：レベル別ルーティン

LEVEL 1



初心者向け

まずはここからスタート



12時間断食

夕食を20時までに終え、朝8時まで水のみ



朝日を浴びる（10分）

体内時計をリセットし、睡眠の質を向上



23時までに就寝

成長ホルモンとSIRT1の連携を確保

LEVEL 2



中級者向け

習慣化したらステップアップ



16:8 断食

空腹時間を16時間に延長（オートファジー始動）



週3回の運動

特に「空腹時のHIIT」が効果的



冷水シャワー

週1回以上、入浴の最後に30秒

LEVEL 3



上級者向け

活性化を最大化する



NMN 摂取

朝食前 250–500mg（予算が許せば）



レスベラトロール

100–500mg を脂肪分を含む食事と共に



モニタリング

定期的な血液検査 & 生物学的年齢チェック

まとめ：老化は選択である



サーチュイン=細胞の守護者

サーチュイン遺伝子はDNA修復、代謝調整、炎症抑制を担う重要な司令塔。老化を「不可逆的な劣化」ではなく「情報の喪失（エラー）」と捉え直すことで、対策が可能になる。



NAD+が燃料、加齢で低下

サーチュインを働かせるにはNAD+が不可欠だが、40代で半減する。この減少を食い止め、回復させることが老化制御の核心的アプローチ。



最適解は「組み合わせ」

「運動 × 16時間断食 × 7-8時間睡眠」が最強のベースライン。これに寒冷刺激やサプリメント（NMN等）を加えることで、相乗効果を最大化できる。



NEXT STEP

「いつか」ではなく、
今日、1つだけ変えてみる。

例：今夜の夕食を1時間早く終える、
明日の朝、冷水シャワーを30秒浴びる。



Selected References

- Sinclair DA, LaPlante MD. "Lifespan: Why We Age—and Why We Don't Have To." Atria Books (2019)
- Guarente L. "Sirtuins, aging, and metabolism." Cold Spring Harb Symp Quant Biol (2011)
- Yoshino J, et al. "Nicotinamide mononucleotide increases muscle insulin sensitivity in prediabetic women." Science (2021)
- Cantó C, et al. "AMPK regulates energy expenditure by modulating NAD⁺ metabolism and SIRT1 activity." Nature (2009)